

第13回「日本人学生の『アジア体験』コンテスト」 入賞者企画実施報告書

テーマ「ラオス・インドネシア・ミャンマーで体験したいこと」

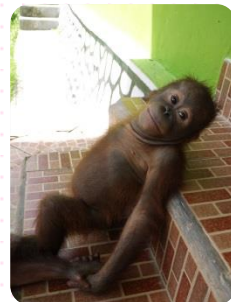
① 阪本 絢子（東京大学 農学部 環境資源科学課程 緑地生物学専修）

実施国：インドネシア

テーマ：インドネシアで熱帯雨林の再生とオラウータン保護活動の実態調査

内 容：インドネシアにおいて熱帯雨林やオランウータン保護活動に対して企業、政府と NGO がどのように関わっているか、実際に現地を訪問し、関係者に話を伺うことで理解を深め、特に現地の NGO を直面する課題と今後の可能性について考える。

[実施報告 PDF](#)



② 伊東 真未（慶応義塾大学 看護医療学部 看護学科）

実施国：インドネシア

テーマ：インドネシアの若者に対し、STI 予防啓発をする

内 容：現地でセックスワーカーたちの現状を調査し、現地の医学生とディスカッション、将来医療者になる者・国際協力に貢献する者として経験を得て、日本を含めたアジアやアフリカにて、女性の心身の健康やセクシャルヘルス、リプロダクティブヘルス/ライツの増進に貢献していくことを考える。

[実施報告 PDF](#)



③ 河野 好恵（兵庫県立大学 大学院 経営研究科 専門職課程経営）

実施国：ミャンマー

テーマ：ミャンマーにおける宇宙ビジネスの可能性

内 容：ミャンマーがどのような現状なのかということやどのようなニーズがありそうかを探るため、現地視察やインタビューを行い、宇宙ビジネスを海外（特に新興国）で展開するために現状を把握し、これから必要な課題を抽出する。

[実施報告 PDF](#)



④ 室谷 麻美（金沢大学 大学院 人間社会環境研究科 国際学専攻）

実施国：ラオス

テーマ：ラオス、ヴィエンチャン特別市ブンカム中高等学校での日本語教育支援
～現地生徒の日本語上達・日本への理解促進、及び自身の成長を目指して～

内 容：ヴィエンチャン特別市ブンカム中高等学校の生徒に支援を受けている日本とはどんなところなのか、日本語とは、日本文化とはという事を感じてもらう

[実施報告 PDF](#)



⑤ 西岡 悠美子（東京大学 大学院 新領域創成科学研究科 国際協力学専攻）

実施国：ラオス

テーマ：ラオス南部サラワン県ファイホン村住民の伝統布製品の世界中への普及活動

内 容：ラオス人民民主共和国南部サラワン県、サバナケット県に位置する 5 村を訪れ、現地住民の文化や伝統に対する考えを、直接対話を通じ理解し、一生涯のアジア体験をする。・ 村の持続可能な発展に寄与する機会として、地域産品の世界中への普及活動に協力する。特に、自身の得意分野である「ラオス語」「フィールド調査」を生かし活動する

[実施報告 PDF](#)



インドネシアにおける熱帯雨林再生とオランウータン保護活動の実態を学ぶ

東京大学農学部 4 年 阪本絢子

1. 企画実施期間、企画実施地

2013 年 1 月 4 日~1 月 22 日、カリマンタン島（サンボジャ、バリクパパン）、ジャワ島（ジャカルタ、ボゴール）

2. 企画実施目的

インドネシアにおいて熱帯雨林やオランウータン保護活動に対して企業、政府と NGO がどのように関わっているか、実際に現地を訪問し、関係者に話を伺うことで理解を深め、特に現地の NGO を直面する課題と今後の可能性について考える。

3. 企画概要

オランウータンの保護と植林活動を行っている現地の NGO である BOSF(The Borneo Orangutan Survival Foundation)のジャカルタ本部オフィスとカリマンタン島のサンボジャ保護地区を訪問し、BOSF のスタッフから詳しく話を伺うと同時に、保護地区内の施設を見学した。また、WWF(World Wide Fund for Nature)のジャカルタオフィスを訪問し、カリマンタン島における取組みについて話を伺った。

4. 活動内容

4.1.BOSF ボゴールオフィス訪問

ボゴールはジャカルタから車で 1 時間程度の場所にあり、雨の都と呼ばれる緑の多い都市であった。渉外担当の Iwan Pribadi さんに約 2 時間、BOSF に関する様々な質問に答えて頂いた。

BOSF は東カリマンタンのサンボジャ保護地区で約 250 頭、中央カリマンタンの Nyaru Menteng では約 650 頭のオランウータンを保護しており、一頭当たりで一年で約 35 万円の費用がかかるそうだ。この費用には食費と医療費が含まれ、これに別途、オランウータンを森に返す際のヘリコプターやその後のモニタリングの費用もかかる。つまりオランウータンの食費と医療費のみで一年で最低約 3 億円かかるということである。この莫大な費用は、ほとんどが寄付金で賄われているが、財政的に苦しい状況にあると言っていた。またインドネシアの土地はすべて政府が所有しており、BOSF はオフィス、保護施設や生息地としてリリースする土地をインドネシア政府にお金を払って借りている。2012 年にオランウータンをリリースした土地 4600 ヘクタールを 60 年間賃貸するのに、BOSF は政府に約 3 億円(300 億 Rsp)を一括で支払ったと聞いた。契約期間を延ばすように交渉中であるが、カリマンタン島は石油、石炭や天然ガスが豊富に存在するため、土地の賃貸権の獲得はこういった開発会社と競争しなければならず、賃貸価格が高くなり交渉が難しくなっている。運営費の大部分は寄付金で賄われているが、T-shirt などのグッズ販売や、サンボジャ保護地区では一般人向けにエコロジの経営やエコツアーによる収入も多少あるようであった。

4.2.BOSF のサンボジャ保護地区(Samboja Lestari)への訪問

サンボジャ保護地区は 1800 ヘクタールの面積があり、オフィス、Forest School, Orangutan Islands, エコロジ、オランウータンの子供のための養育施設、疾病または検査中のオランウータンの隔離施設、そして植林地で構成されている。職員の数 110 人で、オフィスに約 20 人、エコロジに約 15 人、そしてオランウータンの飼育施設に約 80 人が働いている。ジャワ島出身者はマネージャーの Aschta さんを含め 5 人のみで、その他 105 人はカリマンタン島出身である。



シングルルーム

➤ エコロジ滞在

木造建築で、屋上の展望台からは、BOSF が植林した森林や Orangutan Islands が見下ろせ、何頭かのオランウータンも観察できた。常に虫、鳥、蛙の鳴き声が聞こえ、朝と夜にはオランウータンの声も聞こえた。2012 年は約 100 人程度の訪問客で、一般の観光客の他、学校の長期休みの時期はインドネシアの小学校や中学校の学生がサマーキャンプとして、スタンフォード大学の学生が授業の一環として訪れたらしい。

➤ Sungai Wain Tour

政府の自然保護区に指定されている Sungai Wain は 1990 年代に BOSF がオランウータンを放った場所である。約 3 時間のトレッキングの間、同行してくれた BOSF のスタッフがオランウータンの食事の痕跡や、リリースした地点を教えてくれた。BOSF のスタッフの他に、ボランティアとしてインドネシア大学法学部の学生も同行してくれ、インドネシアの土地の賃貸に関わる法律や制度について説明してもらった。

➤ 展望台 (Forest Fire Tower)

展望台は、主に、山火事が起こっていないか確認するためのもので、上まで登るとサンボジャ保護地区一帯を見渡すことができた。保護地区のすぐ外は、石油、石炭、天然ガスなどの採掘場やバリクパパンとサマリンドをつなぐフリーウェイのせいで、森林が伐採されており、一目で境界が分かった。この植林は 1991 年から行われたものだが、植林した植物種リストには、IUCN の絶滅危惧種リストに掲載されている種も数多く存在した。



石炭採掘跡地



Orangutan Island



奥に見える裸地はフリーウェイ

➤ 子供の養育施設訪問

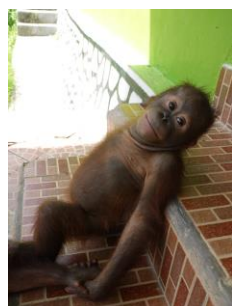


孤児になってしまった子供のオランウータンのための養育施設を訪ねた。目や表情を見ていると、とても人間らしく、BOSF のスタッフが特にオランウータンを保護しようとモチベーションが湧く感情的な理由が理解できた。BOSF では養子制度を設けており、森へリリースされるまで、養子となったオランウータンの成長の様子などが定期的に里親になった人に伝えられるが、その養育費は里親が負担する。2012 年に Bridge Stone の幹部の一人が、二頭のオランウータンの子供を養子にしたと聞いた。ただお金を寄付してもらうのではなく、こういう制度を設けているのは非常に面白いと思った。

➤ Orangutan island と隔離施設の訪問

Orangutan Island には将来的にリリースされるオランウータンが生息しており、周りは水堀で囲まれていて出られないようにしているが、それ以外は自然の生活環境になるべく近いように設計されている。

隔離施設は A~E まであり、ここに入るオランウータンは結核などの病気や何らかの



オランウータンの
赤ちゃん(上)と子供(下)

障害で森へ返すことができないものか、保護地区に来てまだ 4 週間以内で健康検査中のものだけである。

➤ 企業の社員の方へのヒアリング

昨年インターンしていたスマートエナジー株式会社の S さんと某日系企業の社員の方とエコロジで話をする機会があった。CSR の一環として BOSF から植林地の炭素クレジットを購入することを検討しており、スマートエナジー株式会社はそのカーボンオフセット取引のコンサルティングを行っている。これが上手くいけば、寄付に頼るしかなかった BOSF が自分の植林地を用いてビジネスという形で資金を獲得でいるいい機会だと思う。排出権取引を、NGO の財源確保のために使うというアイデアが非常に興味深かった。

➤ Margo Mulyo 村を訪問

保護地区付近にある Margo Mulyo という村に連れて行ってもらった。この付近には、5 つの村があり、各約 100 戸の家がある。現在の BOSF のスタッフはほとんどがこれらの村の出身である。Margo Mulyo の住民のうち約 50%が石油・石炭・天然ガスの採掘会社で働いており、BOSF で雇われているのは約 5%、漁師が 5%で残り的人達は農業（米、野菜、果物、油ヤシ）や牧畜（鶏、羊、カモ、牛）に従事しているらしい。採掘会社の給料は一般的な月給(2 万円)の 2 倍以上らしく、そのおかげでこれらの村は裕福な人が多いと聞いた。農業や漁業に従事している人達は恐らく現金収入は非常に低いが、赤道直下で雨も多く、一年中温暖な気候なので、果物や野菜は一年中収穫でき、どの家庭も鶏を飼っているの、食べ物に困ることはないらしい。

➤ 石炭採掘跡地の見学

保護地区のすぐの外にある、石炭採掘跡地に連れて行ってもらった。昨年に採掘が終了したが、その跡地をそのままにして、石炭採掘会社は去って行ってしまったらしい。かつて熱帯雨林が茂っていたはずの場所には水と油が溜まった大きな穴が残り、その周囲には裸地が広がっていた。大きい採掘会社は会社の社会的責任や評価を考慮して、採掘後の処理はしっかりするらしいが、小会社はこのような採掘後はそのままにして去ってしまうことが多いらしい。

4.3 WWF ジャカルタオフィス訪問



インドネシアの WWF 本部

土地利用計画部門の四人のスタッフの方が対応して下さった。2007 年に生態系サービス評価ツールを用いて、カリマンタン島で生態系の観点からより重要な地域を選定し、マレーシア、インドネシア、ブルネイの三政府に Heart of Borneo という保護プロジェクトを提案した。このプロジェクトは現在進行中で、政府の開発計画部会と定期的にミーティングを行い、選定された地域の持続可能な土地利用計画を作成している。ボルネオ島全域を保全計画に組み入れたいが、資源的に制約があるので、生態系観点からより重要な地域を選定して取り組んでいるそうだ。BOSF が活動している地域は HoB 外の地域にある。HoB の外は、政府が開発区か保護区か割り振っており、開発区と決められた場所ではある一定以下の規模なら地方自治体の許可のみで採掘会社は開発を行うことができるそうだ。

5. 考察

BOSF のサンボジャ保護地区は、上記の HoB の範囲外かつ開発区となっている。このために、一定規模以下の開発に関しては、採掘会社は地方自治体の許可のみで行うことができる。賄賂と引き換えに地方自治体は、開発後の修復を行わない小規模な採掘会社に対しても開発の許可を下すことが多い。また、BOSF の活動の認知度は周辺の村では高く、スタッフは BOSF で働くことを誇りとしているようであったが、採掘会社の

支払う給料は他の職に比べてかなり高額なため、環境には悪いと分かっているにもかかわらず、採掘会社で働く現地人が多い。植林やオランウータンの生息地確保などの活動によって維持または向上された生態系サービスの価値を経済的に換算すれば長期的に見れば決して **BOSF** の活動を拡大することが経済を犠牲にして、自然保護を行うという解釈にはならないはずだが、残念ながら現段階の中央政府や地方自治体の土地利用計画では十分にこうした視点が反映されていないと思われる。こうした中で、サンボジャ保護地区を維持し、オランウータンの生息地を確保するためには、今後も **BOSF** はオランウータンの飼育、リリースや土地の賃借に多額のお金を負担しなければならないだろう。**BOSF** が現在財政的に苦しい状況にあることを考えると今後は寄付金のみに頼らず、植林地による炭素クレジットを利用した排出取引、エコロジやエコツアーの運営拡大などによる財源の確保が必要だと思われる。

インドネシアの若者に対し、STI 予防啓発をする

2013 年 3 月 14 日

伊東真未

1. はじめに

私は将来、医療者として開発途上国などで国際協力活動をし、世界の医療や保健水準の向上、特に女性の心身の健康の増進に貢献したいと思っている。私はそのために、大学で看護師になるための勉強をし、海外研修や海外ボランティアにも多数参加してきた。2012 年には、大学のサークル活動の一環で、インドネシア・スマラン市の売春宿街に行き、売春宿街で働くセックスワーカーたちに STI (Sexual Transmitted Infection : 性感染症) の予防啓発をした。売春宿街で働く女性達はその仕事を長く続けていく気はないらしく、将来他の仕事に就くことを夢見ている、そのための資金稼ぎとして売春をしている。私は彼女達の現在の仕事を辞めさせるわけではなく、彼女らの心身の健康を大切に、人生の次のステップに進むための支援ができれば良いと考えた。そして、彼女達が夢を実現するための過渡期に STI に感染しないようにすることが、医療者として彼女達のためにできることだと考えた。この時、私は、セックスワーカーたちの STI 感染予防をするためには、その顧客となり得るインドネシア市民に対し STI 予防啓発をする必要があると感じ、市民を対象にした STI 予防啓発キャンペーンを実施するに至った。

2. 実施内容

2-1. 売春宿街の視察

2013 年 2 月、私が訪れたスマラン市内の売春宿街には 150 名程度のセックスワーカーが働いていた。セックスワーカーや売春宿の運営者、顧客には「コンドームを使用する（させる）」という規則があったが、実際にその規則は守られておらず、セックスワーカーたちは顧客との性交渉の 40% でコンドームを使用できていないことがわかった。その理由は、セックスワーカーたちが顧客にコンドーム使用を促すと顧客から貰える金銭が少なくなってしまうことを恐れているからであった。このことから、顧客となり得る市民に対し STI 予防啓発をすることが、セックスワーカーたちの健康を守ることに繋がると再確認できた。



(写真 1 : 売春宿街の入り口)

2-2. 現地の医学生とのディスカッション

現地の医学生の協力を得て、どのような戦略で啓発活動を行うかを考えた。顧客となり得る男性のみではなく、若者やカップルなど STI に感染しやすいと考えられる市民を対象として地域全体の STI 感染率を低下させることによってセックスワーカーたちの健康を増進させることを本活動の目標に設定した。若者が多く集まる場所・時間を考慮し、2013 年 3 月 2 日（土）19 時よりスマラン市街地にてキャンペーンを実施することになった。キャンペーンのスローガンは「KNOW MORE STI , NO MORE STI (STI についての知識を深め、これ以上の STI 感染を予防しよう)」というものになった。

医学生とは、リーフレットや横断幕の作成も行った。リーフレットにはインドネシア語で、HIV/AIDS・梅毒・カンジタ・クラミジア・尖圭コンジローマなどの症状と予防法が記載されている。リーフレット配布数の目標は、

医学生と話し合った結果 1500 枚となった。



(写真 2・3：作成した横断幕とリーフレット)

2-3. STI 予防啓発を目的としたキャンペーン実施

キャンペーンでは横断幕を持ってスマラン市街地を歩き、市民に対して STI について簡潔に説明しながらリーフレットを配布した。リーフレット配布時、市民は恥ずかしがったり照れたりする様子も見られたが、我々の STI の解説を真剣に聞いてくれた。また、現地医学生・一般学生の多くが本活動に協力してくれたため、私を含めたキャンペーン実施運営者は想定をはるかに超えた 30 名以上となった。用意していたリーフレット 1500 枚はほぼ全て配布することができた。

(写真 4：

キャンペーン実施運営者の集合写真)



3. 活動評価

今回のキャンペーンでは多くの市民に対して STI 予防啓発を行うことができた。しかし、市民の STI に関する知識調査を実施することができなかったため、キャンペーン前後で市民に対してどのような影響を与えられたかは不明である。今回の 1 度きりのキャンペーンではスマラン市内の STI 感染率を低下させるまでのインパクトはなかったかもしれない。啓発活動を継続的に実施する必要性を感じた。

市民に対してどれほどの影響を与えられたかは不明だが、キャンペーンに賛同してくれた現地学生には強いインパクトを与えることができたと評価する。彼ら自身の STI 予防行動を推進できたことは勿論、彼らは市民に対する啓発活動を今後も継続してくれる可能性がある。私自身も本活動が現地に根付くまで支援を続けることに尽力したいと思う。

3. おわりに

近年、アフリカなどの国々では徐々に HIV/AIDS 蔓延が軽減してはいるものの、アジア・特に日本やインドネシアでは依然として感染者が増え続けている現状がある。これは、医療インフラ不足などの物理的要因というより、「性に関する事柄のタブー視」や「純潔教育」などの文化的・社会的・心理的要因が大きい。人々の考え方や意識を変化させることは容易ではないが、逆に、学生同士・若者同士だからこそできることがあると、本活動を通じて痛感した。本活動を通して、私は将来医療者になる者・国際協力に貢献する者として経験を得て、成長することができたと思う。大学卒業後は、看護師・保健師・助産師としての実務経験を得たのち、日本を含めたアジアやアフリカにて、女性の心身の健康やセクシャルヘルス、リプロダクティブヘルス/ライツの増進に貢献し

たい。まずは、日本や、今回の活動を経て多くの仲間と経験を得たインドネシアをベースキャンプに、今後も活動を続けていこうと思う。

最後になりましたが、今回の私の活動を支援してくださった共立国際交流奨学財団の方々に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

以上

第13回アジア体験コンテスト 体験レポート
ミャンマーにおける宇宙ビジネスの可能性

兵庫県立大学大学院 経営研究科 経営専門職専攻
河野 好恵

はじめに

宇宙と新興国をつなげる。そんな夢のような研究をしている。宇宙の技術を使い今まで解決できなかった問題を解決するため、この体験が実現への第一歩となる。

調査目的

宇宙ビジネスを海外（特に新興国）で展開するために現状を把握し、これから必要な課題を抽出する。

調査方法

ミャンマーがどのような現状なのかということやどのようなニーズがありそうかを探るため、現地視察やインタビューを行う。

調査行程

2/25～3/2の5泊6日の日程でヤンゴン・マンダレー・インレー湖・タウンジーを訪れ、途中ミャンマー人の知人に話を聞いた。

日程		場所	内容
1日目	2月25日	ヤンゴン	入国 ジャクソンスクエア シュエダゴオン・パヤー
2日目	2月26日	ヤンゴン	アウンサンマーケット スーレー・パヤー ミャンマー人の知人と食事
3日目	2月27日	ヤンゴン ↓ マンダレー	ゼエジョーマーケット
4日目	2月28日	マンダレー ↓ インレー ↓ タウンジー	マーケット インレー湖周遊 ワイナリー
5日目	3月1日	タウンジー ↓ ヤンゴン	タウンジーマーケット
6日目	3月2日	ヤンゴン	出国

体験の様子

ミャンマーの最先端

一番初めに向かったのはジャンクションスクエアである。ここは2012年3月にオープンした商業施設である。総売場面積は約27,900m²で化粧品、スーパーマーケット、映画館、洋服、雑貨、家電など幅広い店舗がある。ダイソーや資生堂、キャンメイクといった日本企業も出店している。

入店する際にセキュリティチェックのようなものがあった。だがあまり厳重にはなされていないようだ。ジャンクションスクエアには、ミャンマー伝統衣装のロンジーを販売している店舗もあったが、いわゆる今風のファッション店もあり、来店している若者には露出の高い服装で髪を染めている人もいた。ジャンクションスクエア周辺の店舗、人は、日本と大差ない印象を持った。周囲は工事が進んでおり、これからミャンマーはどんどん発展しそうな印象を受けた。

ジャンクションスクエア外観と店内の様子、および近隣の工事の様子



ミャンマーの伝統

1日目の夜はミャンマー人の友人とシュエダゴオン・パヤーに行き、その後食事をした。シュエダゴオン・パヤーはミャンマー最大の聖地で2500年の歴史を持つといわれている。訪れたのは夕方だったが、朝から晩までひっきりなしに人が訪れるそう。ミャンマーでは自分が生まれた曜日を大切にしており、パヤーにはその曜日の守護動物が祀ってある場所があり自分の曜日で御参りをするそう。熱心に祈る人を多く見かけた。



夕日に輝くシュエダゴオン・パヤーと祈る人々

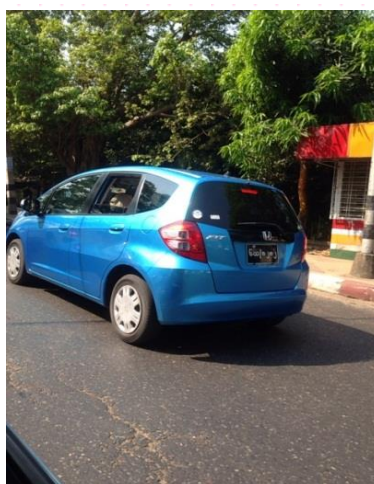
その日の夜はミャンマーの伝統的な食事を体験させてもらった。羊肉や鶏肉、野菜のカレーやラペッソーというお茶を発酵させ出がらしのようにしたものとピーナッツなどを合えたもの、米を使ったデザートを頂いた。ミャンマーの料理は油が大量に使われており、コーヒーにも油が浮いていた。だが味は非常に美味しく、特にラペッソーはお茶の苦味とピーナッツの食感が癖になる美味しさであった。



レストランの様子。料理を見て注文するスタイルだった

変化するヤンゴン

2日目はヤンゴン中心部を巡った。まずはミャンマーで一番有名なマーケットであるボージョーアウンサン・マーケットに向かった。しかしヤンゴン市内の交通渋滞はひどく、普通ならホテルから市内へ20分もかからない距離なのに到着まで1時間以上掛かってしまった。すれ違う車はほとんど日本車で、乗車したタクシーも勿論日本製であった。出会ったミャンマー人は日本車のブランド力、性能の良さを口を揃えたように言ってくれた。



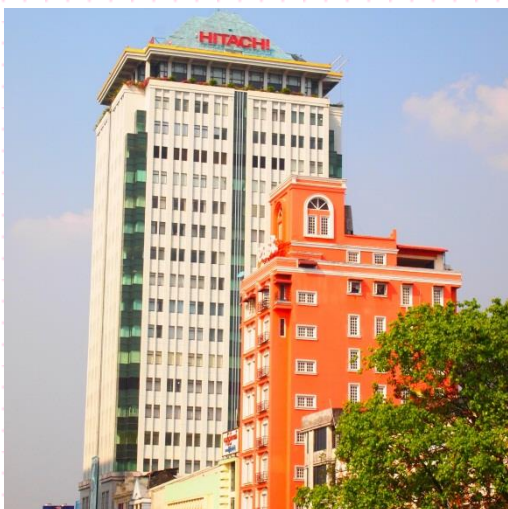
ヤンゴン市内の道路の様子と日本車

やっとの思いでついたボージョーアウンサン・マーケットは主に宝飾品や生地、籐製品など食料品以外のほとんどを扱っていた。観光客も多く、英語、日本語、中国語などで声をかける店員が多くいた。色とりどりの布生地はミャンマーの伝統衣装ロンジーを作るためである。巻きスカートのようなもので男女関係なく着用している。マーケットには縫製所もあり、オーダーメイドのロンジーも作れる。



マーケットの様子。ロンジー用の生地と宝飾品店が多かった

続いてヤンゴン中心地にあるスーレー・パヤーまで歩いて向かう。中心地は基盤の目のように整備されており分かりやすい道になっている。その途中に日系企業が多く入居しているさくらタワーを見つけた。高層ビルはかなり目立っていた。また日本でいえば秋葉原のような電気街もあった。ミャンマー人によると車は日本製だが、家電は韓国、サムスンが人気らしい。



さくらタワーと電気街

そして辿り着いたスーレー・パヤーの中に入ると一気に時間の流れがゆったりしたような感覚になった。日差しが当たらない日影部分は、ひんやりした床と相まって心地よい。きっとパヤーでくつろいでいる人も同じ考えなのだろう。祈りをささげる人、眠る人、談笑する人、遊ぶ子どもたち。平日の日本ではありえないようなゆったりとした雰囲気があった。

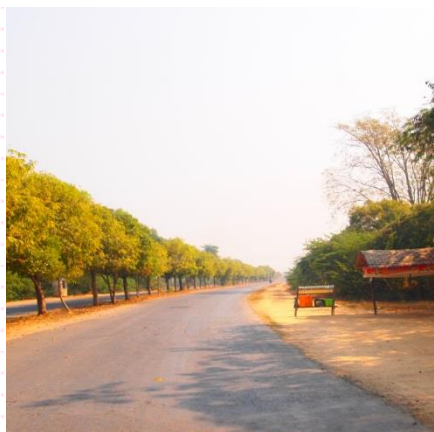


スーレー・パヤーの様子

ロンジーを身に纏い、パヤーで祈りをささげるという昔からあるものと外車や家電製品、外国の生活様式という新しいものが入り混じるヤンゴンは、間違いなく現在進行形で変化している街であった。

眠らないマーケット

次へ向かうはミャンマー第2の都市、マンダレーである。空港は移動して市内から約 50 km離れたところにある。長い道のりを同じタクシーに乗りあった日本人の方と運転手と話しながら中心地へ向かう。ここでヤンゴンとの違いに気づいたのだが、マンダレーでは異常な数のバイクを見かけたがヤンゴンではバイクを見かけなかった。後日調べるとヤンゴンではバイクの乗り入れが禁止されているようだ。マンダレーは私が想像していたバイクが大量に通るような賑やかなアジアのイメージそのものだった。





整備されたマンダレーの道路と日本では目にかかれぬ光景

マンダレーにはゼエジョーマーケット周辺のかかなり広い範囲でマーケットが存在する。最大のゼエジョーマーケットは5階建てのショッピングビルに見えるが、実際は2階までしか店舗がない。1階は所狭しと店があるが2階は空き店舗も見かけた。また中は薄暗く電気が付いておらず、エスカレーターも止まったままだった。マンダレーでもカラフルな生地を売る店が多かった。



ゼエジョーマーケットの様子（上）と周辺のマーケットの様子（下）

さらに興味深かったのは時間によって変化する街の様子である。ゼエジョーマーケットが開いている夕方までは車の通りも多く渋滞していることもしばしばあった。ミャンマー特有の取り敢えずクラクションを鳴らすせいで騒音もかなりある。しかし夕方を過ぎると車はなくなりクラクションの音も少なくなり少し静かになる。また

車の代わりに露店が軒を連ねるようになる。そして早朝には何やら大音量で歌う（お経かもしれない）声が響き、街を清掃し屋台で朝食を食べ、またマーケットが開き1日が始まる。



変化する街の様子

移動マーケット

4日目、マンダレーからインレー湖へ向かう。前日空港から市内へ連れて行ってくれた運転手をお願いをして、空港へ連れて行ってもらった。いろいろ話をしながら、朝食を食べたり、パヤーに寄ったりしながら空港に向かった。

インレー湖のあるニャウンシェの最寄空港はヘーホー空港というところである。しかしこちらにもニャウンシェまで車で1時間掛かる。山道を通り途中で移動マーケットをしているというので寄ってもらった。この周辺では5日ごとの日替わりで場所を変え各地域から人が集まってマーケットが開かれる。このマーケットでは生鮮食品が売られていることが多かった。



マーケットの様子。村は小規模だが、人も商品も多く賑わっていた

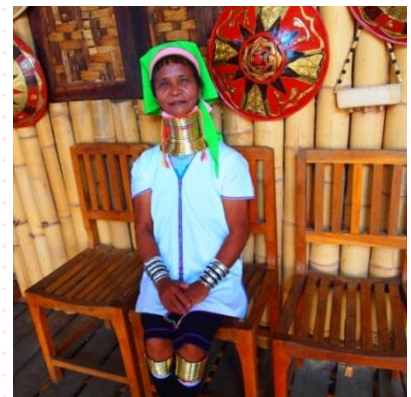
水上栽培

インレー湖は海拔1300mのシャン高原に位置し、長さ22km、直径10kmの湖で琵琶湖の40%ほどの規模である。ここにはインダー族が水上に家を建てて暮らしている。特徴的なのが片足でオールを操作し舟を漕ぎ、漁をする手法である。



水上での暮らしの様子

また伝統的な旗織物の様子やタバコの製造過程を見たり、首長族の女性に会ったりすることもできた。ただ見世物のようになってしまう彼女の姿は快い気分にはなれなかった。



作業の様子や首長族の女性

インレー湖で暮らすインダー族は漁だけでなく、農作物も湖上で育てている。主にトマトやピーマン、稲などが育てられており、インレー湖のトマトは小ぶりであるが美味しい。後で詳しく説明するが、この水上栽培では宇宙技術が解決に貢献できそうな課題が見つかった。



水上栽培の様子

ワイナリー

インレー湖からタウンジーへ向かう途中、ワイナリーがあることを教えてもらい寄ってもらった。

ここはドイツ人の企業家が、ヨーロッパから輸入した葡萄の苗を 1999 年に植え、ワインの製造をはじめたそう。リゾート地として観光客向けの宿泊施設を建設中らしい。インレー湖から変わらないミャンマーを見てきたが、こんな山間部にも変化の兆しを発見した。

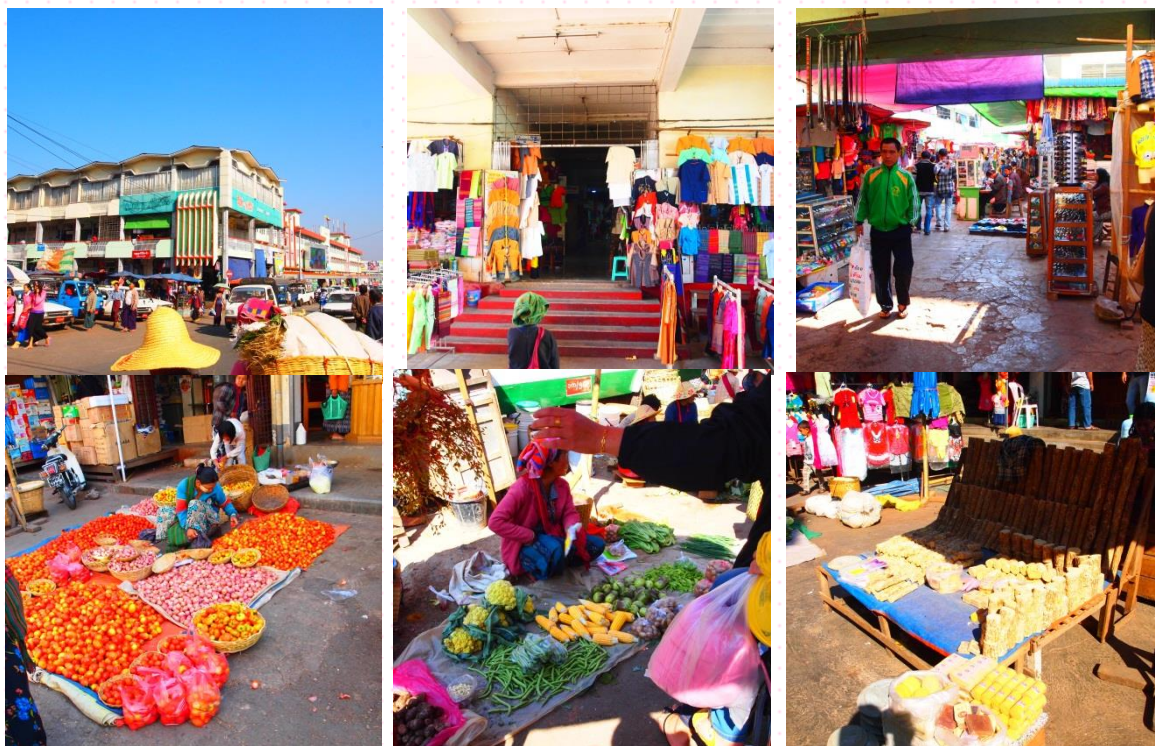


ワイナリーの様子。レストランはリゾート風でお洒落である。

タウンジーマーケット

タウンジーはシャン州の中心となる都市で、標高 1,430m と高地にある。「タウンジー」は大きい山という意味だそう（ミャンマー語では「タウン」は山、「ジー」は大きいという意味）。山頂にあるにもかかわらず州の中心部であるので、山道では買い物帰りなのかたくさんの荷物を積んだ車やバイクをかなり多く見た。

最終日に訪れたタウンジーのマーケットはかなりの大規模で服や雑貨、生鮮食品など幅広い品揃えであった。今まで訪れたマーケットには見かけなかった野菜やタナカという化粧品の原料となる木がおいてあったことが印象的であった。そして建物内はやはり電気がついていないことが多い。



マーケットの様子。電気は付いていないが品物はとても色鮮やかだ

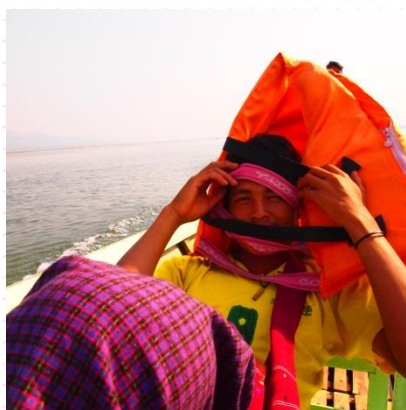
ミャンマーの今

ここまでわたしが体験したミャンマーを紹介してきた。次にこの体験から感じたミャンマーについて述べたいと思う。

Are You Happy?

今回出会ったミャンマー人にならずとって良いほど聞かれた言葉である。笑顔で返事するたびになんとなく幸せな気分になった。そしてこの体験途中困ったことはあまりなかった。それはミャンマー人が助けてくれたり、気さくに話しかけてくれたりしたおかげだと思う。実際ミャンマーに行き、ミャンマー人の人の良さに直接触れることが出来た。

またこどもたちの笑顔も印象的であった。写真の腕があまりよくないのが残念だが、屈託のない笑顔を見せてくれたり、少し恥らいながら手を振り返してくれたり見ているだけで幸せになれた。



笑顔をみせてくれた子供たち。カメラの腕がないのが残念である

日本ブランドの強さ

日本人がはじめてミャンマーの地に降り立つと不思議な感覚に襲われることだろう。なぜなら走る車のほとんどは日本車だからである。日本語がそのまま書かれているバスやトラックも多くある。日本の製品が海外で支持されている様子を見ると改めて日本のものづくりの強さや日本のイメージの良さを実感できる。



ミャンマーで見つけた日本語



祈る姿

ミャンマーでは僧侶をよく見かける。バスや空港では僧侶優先席なるものもある。また点在するパヤーに朝から晩までひっきりなしに訪れ祈る人々。ミャンマー人にとっては日常の光景かもしれないが、私にとっては新鮮な光景であった。このように宗教が生活の一部になっている様子はなかなか日本で出会うことがないものであった。きっと仏教の教えや熱心に祈ることで思いやりのある人が多いのではないだろうかと感じた。変わり行くミャンマーで変わらないものであってほしい。

僧侶優先席と祈る人々

課題

今回はインフラと農業という2つの課題を知ることが出来た。

インフラ

課題の一つとしてやはりインフラの未整備を実感した。通信面では携帯電話が普及しつつあるが、電話に関しては路上に電話所が点在していた。これは電話を貸し、通話時間を計って料金を支払う仕組みだそうだ。またヤンゴン市内ではWi-Fiスポットがあっても使えないこともしばしばあった。電気は体験の様子で紹介したように、建物内であっても電気はあまりついておらず薄暗い。停電も日常茶飯事で数回経験した。道路は整備が進んでお

り、工事中の箇所をよく見かけた。整備が進んでいる反面、中心地ではひどい渋滞が慢性的に発生している。信号があまりないため、警察官が指示している場面もよく見かけた。

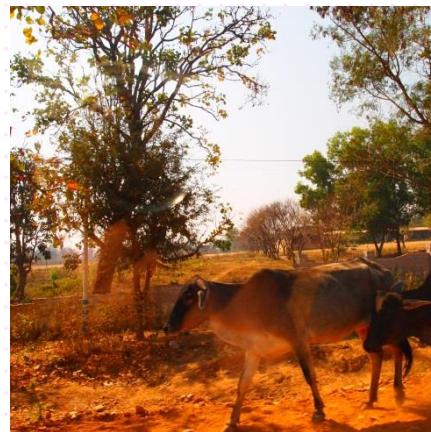


工事中の様子、路上電話所、暗い建物の中

農業

農林水産省のデータによるとミャンマーの GDP に占める農業の割合は 47.9%（2009 年）であり、ミャンマーの主要産業の一つと位置づけることが出来る。農業に関する課題としては、今回見学をしたインレー湖の水上栽培で課題を知ることが出来た。それは収穫量を増やすため化学肥料や農薬を大量に使った結果、湖が汚染され、生態系の破壊などにつながっているということである。

またミャンマーとお茶の深いかかわりを実感した。お茶は食事処では必ずテーブルに置いてある。もちろん無料で飲み放題である。そしてお茶を飲んでいれば長居をしても何も言われなさそう。味はウーロン茶に近いが香ばしさもあり、美味しかった。またお茶は飲むだけでなく、ラペッソーという食べ物としても親しまれている。



農業の風景

課題と宇宙技術

今回知りえた課題に対して今現在貢献できる宇宙技術を提案する。

衛星観測システム

人工衛星には通信、高精度位置情報、観測などという機能を持つものがある。メリットとしては夜間や悪天候時に観測が出来ることや広域の観測が可能であること、航空機による観測が困難な地域でも観察可能であるとい

うことだ。

・GPSによる交通渋滞解消

GPSは人工衛星を利用して自分が地球上のどこにいるのかを正確に判断することのできるシステムである。携帯電話やカーナビなどに組み込まれている。この仕組みを利用し渋滞状況を判断し、目的地までの最善ルートをナビゲーションできるようになれば渋滞緩和に繋がるかもしれない。

・衛星データを活用したお茶栽培

お茶の産地、佐賀県嬉野市では衛星データを用いた「衛星の恵み」というお茶が作られている。この仕組みは以下のようになっている。

人工衛星の撮影した画像から、茶の甘みを決めるテアニンを生成しやすい性質を持つ「窒素含有率が6%以上で、繊維含有量18%以下」の茶木を抽出。さらに地上の気象モニターシステムから気温や土壌中の水分などを把握し、摘み取り時期など判断していく。

このように衛星データを用いて、効率的かつ品質のよいお茶作りを行っている。

これはそのままミャンマーでのお茶作りに用いることが出来る可能性がある。また同じように衛星データから水上栽培の土壌を分析し、良質の土壌作りにも役立つことが出来るのではないだろうか。

問題点としては費用面や宇宙技術のない国でのシステムサポートをどのようにおこなうのかといったことが考えられる。それをどのように解消するかが新興国での衛星利用の課題になる。

おわりに

今回の体験では、まずミャンマーの現状を知るために様々な地域に行き現状を体験してきた。そして現在の課題にあわせ、現在ある宇宙技術の提案という方向でまとめた。これからの研究課題は、新興国のニーズをより深く知ることにあると考える。今回のミャンマー調査で分かったように、新興国ではインフラの整備や産業の成長が課題となる場合が多いだろう。それぞれの国や企業にあわせた課題解決法を提案するには、宇宙技術が問題解決に役立つ可能性があるということを認知してもらうとともにニーズ調査が不可欠になる。今後はこの2つの点に注力し、新興国の成長に日本の宇宙技術が貢献するために研究を進めたい。

最後になりましたが、「まずは知ってきなさい」とこの体験をさせてくださった共立国際交流財団様および関係者様に感謝の意を表します。本当に貴重な経験をすることができました。ありがとうございました。

参考資料

農林水産省 ミャンマーの農林水産業概況

http://www.maff.go.jp/j/kokusai/kokusei/kaigai_nogyo/k_gaikyo/mmr.html

JAXA「星の数ほどある宇宙ビジネス」 産業連携事例集 2012

http://aerospacebiz.jaxa.jp/jp/publish/data/aerospacebiz_2012.pdf

「日本人学生の『アジア体験』コンテスト」報告書

2013/3/8

金沢大学大学院 人間社会環境研究科
国際学専攻 日本語教育・日本文化研究コース
博士前期課程1年 室谷麻美

ラオス、ヴィエンチャン特別市ブンカム中高等学校での日本語教育支援 ～現地生徒の日本語上達・日本への理解促進、及び自身の成長を目指して～

1. 活動目的

私は16歳のころから日本語教師を目指しており、金沢大学学部時代には日本語主専攻、大学卒業後は中国の大学で2年間、日本語教師として教え、平成23年の夏に帰国し、平成24年春からは意を新たに、金沢大学大学院博士前期課程で日本語教育を勉強しています。

実際に、日本国内、中国で日本語教師として働いた経験は今まであるのですが、大学1年の夏に石川県ユネスコ協会青年部が実施するベトナム・カンボジアスタディーツアーでカンボジアの日本語教室（寺子屋のようなもの）に参加した時に、私自身の知識の足りなさや、現地の人の持つニーズがうまく把握できていなかったこと等があり、私自身が思い描いていた程、現地の人の役に立つことができなかったことが今でも記憶として色濃く残っていました。また、いつか東南アジアの日本語教室（大学のような設備が整った高等機関ではなく、寺子屋のような学校）で日本語を教える経験ができれば、きっとあの時の経験や反省を活かし、現地の人の役に立てるのではないかと考えてきました。そんな時、インターネットで今回の企画を知り、より一層その思いが強く蘇ることとなり、応募に至り、企画を採用していただきました。やはり、世界各国・地域の学習者を相手にする日本語教師として、世界各地で実施されている様々な教室、環境状況等を実際に知ることは必要だと感じますし、その事を通して、私自身の今後目指すこととなる「日本語教師像」も変わってくると思います。

このコンテストを通して、ヴィエンチャン特別市ブンカム中高等学校の生徒に支援を受けている日本とはどんなところなのか、日本語とは、日本文化とはという事を感じてもらうこと、そして、自身の成長を目的にラオス渡航となりました。

2. ラオス、ヴィエンチャン特別市ブンカム地区への支援

2. 1 教育支援現場、支援概要

ラオスの首都ヴィエンチャン中心地から35km程、車で1時間の距離にあるブンカム（VEUNKHAM）中高等学校には、10年ほど前から石川県の野々市ロータリー（2610地区）の支援で、保育園やITセンター、公民館が建設され、更に去年9月には現地に合った有機農業を普及させるべく農業支援センターがブンカム中高等学校敷地内に作られました。そこには、農業専門家の日本人2人が農業を目的に駐在しながら支援をしているのですが、農業支援の他にも、隣接するブンカム中高等学校で課外授業として日本語教室を定期的に行っているということで、筆者もそこに参加させていただきました。

ブンカム中高等学校

現地住所：veunkham secondary school, ban veunkham, maung, xaithanee, vientiane, lao

2. 2 ラオス、ブンカム中高等学校での日本語教育支援

現地に住んでいる日本人支援者と連絡を取り進めるにあたり色々な意見をいただくことができ、現地で支援を行っている日本というところがどんなところなのか、そして、世界に目を向けてもらう事を目的に、A「日本交流会」とB「日本語クラス」に分けて、2つのプログラムを行うことにしました。

A「日本交流会」というのは、今まで課外授業で日本語を勉強していない生徒にも開放し、多くの希望者に日本を知ってもらい、身近に感じてもらうことを目的に開講しました。学校に交渉し、1回あたり90分の日本交流会を2回設けてもらうことができ、2月26日（火）、2月27日（水）に決行しました。1回目（2/26）は、日本を知ることを中心に、日本の位置の概説、日本文化、そして、話のメインを日本の中高生の生活とし、現地の生徒には真新しいパワーポイントを使用して日本の中高生とラオスの中高生の1日について比較しながら話を進めていきました。



パワーポイントを使って写真で紹介



初めて見るパワーポイントに興味津々

A「日本交流会」2回目（2/27）は、日本の食文化を知ることを中心に、日本人の食生活（朝昼晩どんなものを食べているのか）、日本人に人気の料理であるカレーライスの歴史紹介、更にはカレーライスを全員で調理し、実際に試食しました。



日本人の食生活、カレーの歴史を紹介



カレーをみんなで作る

B「日本語クラス」では、去年秋ごろから希望者を募り、開講しているということでしたので、その生徒を対象に行うこととしました。企画書作成時点（2012年10月10日現在）では、ひらがなのら行既習の段階であり、筆者が現地を訪問できる頃には、仮名段階を終えて文法等を教える予定でいたのですが、実際は希望者が来る課外授業であること、週に2日（1回あたり45分）で行われていることから、筆者訪問時（2013年2月）でも仮名の定着が怪しい段階でした。そこで、筆者がブンカム地区に滞在中に行えた全2回のクラ

スでは、仮名定着、挨拶導入を目指して授業を行いました。



挨拶の導入



あいうえおカルタを使って仮名定着、語彙導入

2. 3 実施スケジュール

日付	活動内容	備考
2月23日(土)	中部国際空港 10:35 発→ベトナムハノイ 14:45 着【VN347】 ベトナムハノイ 17:25 発→ビエンチャン/ワットタイ国際空港 18:35 着【VN2897】 ブンカム村行の最終バス終了後のため、ビエンチャン宿泊	
2月24日(日)	午前、ビエンチャン 午後、ブンカム村へ移動	
2月25日(月)	午前、ブンカム中高等学校の学校関係者、及び、ブンカム農業支援センターの日本人駐在員に挨拶 午後、ブンカム中高等学校、ブンカム農業支援センター見学	
2月26日(火)	日本交流会 1日目	生徒 30名
2月27日(水)	日本交流会 2日目	生徒 30名+現地 教師 10名
2月28日(木)	日本語クラス	生徒 15名
3月1日(金)	野々市ロータリーが建設したブンカムの保育所、IT センター(中高生対象にパソコン授業を実施)を見学	
3月2日(土)	土日、中高等学校授業なし	
3月3日(日)	土日、中高等学校授業なし	
3月4日(月)	授業準備	
3月5日(火)	日本語クラス	生徒 15名
3月6日(水)	午前、ブンカム中高等学校の学校関係者、及び、ブンカム農業支援センターの日本人駐在員に別れの挨拶 午後、空港がある首都へ移動	
3月7日(木)	ビエンチャン/ワットタイ国際空港 11:30 発→ベトナム・ホーチミン 14:45 着【VN921】	
3月8日(金)	ベトナム・ホーチミン 00:30 発→中部国際空港 07:35 着【VN340】	

3. 終わりに

今回、様々な方のご協力を得て、筆者のラオス行きを実現することができました。目的としていた現地生徒の日本語上達・日本への理解促進についてですが、1日あたり30名もの希望者に集まってもらうことができ、日本語クラスに参加していない生徒にも「日本交流会」という形で日本について知ってもらうことができました。実際、ラオスに着いてみると、街中いたるところに日本の支援で建設や工事などが行われたという証である日本国旗を見ることができました。更に、ブンカム地区へ移動する路面バスも最近、日本から送られたもので、車体には大きく日本国旗が描かれていました。ラオスは外国からの支援が多く入っている

国で、その中でも日本は大きな位置を占めていることでしょうし、日本がどのような国なのかを現地の人に知ってもらうことは大きな意義があることだと身を以て感じました。

自身の成長については、設備が整っていないどんな教室でも、生徒のやる気と教師のやる気が合わされば、楽しく実のある授業ができることを感じました。私自身、この先、どの国で日本語教師という仕事をするのか分かりませんが、どこで授業をすることになっても、楽しさを忘れず、現地に合った授業を現地の人のために出来ればと考えています。

この度は2週間という貴重なラオス体験をさせていただき、感謝しております。

ありがとうございました。



滞在先となったブンカム中高等学校

一般財団法人 共立国際交流奨学財団 御中

ラオスで体験したことに関する報告書

【第13回 日本人学生のアジア体験コンテスト】

ラオス南部 5 村の地域特産品を通じた現地の伝統文化理解と普及活動への貢献

この度は一日本人学生にこの様な企画実現の機会を下さり、誠に有難う御座いました。ここに、深い感謝の意を込め、アジア体験実施内容のご報告をさせていただきます。ご高覧いただけますと幸いです。

■ 目的・趣旨

- ラオス人民民主共和国南部サラワン県、サバナケット県に位置する5村を訪れ、現地住民の文化や伝統に対する考えを、直接対話を通じ理解し、一生涯のアジア体験をする
 - ◇ 学部時代より対象としてきたラオスを再度訪問し、国への理解をより深いものとする
 - ◇ ラオスを象徴する「農村」を訪れ、農民の人々と交流をすることで、生涯の繋がりを築く
 - ◇ 現地で活動する日本人との交流を通じ、国を繋ぐ仕事に関する自分なりの信念を創る
- 村の持続可能な発展に寄与する機会として、地域産品の世界中への普及活動に協力する。特に、自身の得意分野である「ラオス語」「フィールド調査」を生かし活動する
 - ◇ 周辺国に比べ経済発展が緩やかなラオスが、最適な発展を遂げることに貢献する
 - ◇ 各村が生産する、地域や民族ならではの産品を活かすことで現地の歴史や文化を守る

■ 実行者

- 西岡 悠美子 にしおか ゆみこ
 - ◇ 現在：東京大学大学院 新領域創成科学研究科 国際協力学専攻 修士2年
 - ◇ 過去：東京外国語大学 外国語学部 東南アジア課程 ラオス語専攻 2011年3月卒業

■ 概要

- 日時：2013年 1月7日(月) - 1月17日(木)
- 期間：11日間
- 場所：ラオス南部 サラワン県、サバナケット県に存在する5村（拠点はパクセー市）
- 内容
 - ◇ **5村の農民とのディスカッション**
 - ・ 村長や地域産品生産グループリーダーとの対話を通じ、各村や地域、民族の伝統や文化について教えて貰い、現地の人々に対する理解を深めた
 - ・ 更に日本にではどの様に各工芸品が作られているかを可能な限り伝達した
 - ◇ **現地で活動している日本人との交流や協力活動**
 - ・ 地域産品のマーケティングを担っている日系企業に大使、製品をどのような方法で世界へ発信していきたいかの具体的な提案を行い、フィードバックをいただいた
 - ◇ **村内の見学**
 - ・ 事前調査で行く事ができなかった村の名所等を見学させていただいた

※ 各村での体験内容詳細は、本報告書最下部に記載させて頂いております

■ 移動

- 空路移動
 - ◇ 往路：タイエアラインを使用し羽田空港からワットタイ国際空港(バンコク)へ移動、シェムリアップ(カンボジア)空港を経由し、ラオス航空でパクセー市内へ
 - ◇ 復路：ラオス航空でパクセー市内からワットタイ国際空港(バンコク)へ移動、チャイナエアラインを使用し、上海空港を経由し、羽田空港へ
- 国内移動
 - ◇ 一般的な交通手段(レンタカー、トゥクトゥク、メータータクシー)を使用した

■ 費用

- ￥300,000

- ◇ 航空券: ￥148,000 (国際線 ￥100,000、国内線: ￥48,000)
- ◇ 宿泊費: ￥22,000 (￥2,000 / 1泊 × 11日間)
- ◇ 活動費: ￥90,000 (レンタカー、通訳者、データ処理アルバイト、質問表翻訳者)
- ◇ 謝礼金: ￥35,000 (各村で謝礼としての地域産品購入費、協力御礼としての謝礼金)
- ◇ 雑費用: ￥5,000 (近場移動のトゥクトゥク、昼ご飯代、文房具購入等)

■ 協力組織

- 国際 NGO クワトロ (<http://ngoquatro.org>)
- PTP 株式会社 (<http://www.ptp.la/index.php/en/>)

■ 報告

- 例年通り、本「入賞者実施報告書」の提出により、ご報告とさせていただきます

■ タイムスケジュール

- 9月下旬 事前調査1実施
- 10月中旬 企画書作成 (訪問日時や内容の検討・決定)
- 12月 企画詳細確定・航空券や宿泊施設の手配
- 1月初旬 現地渡航・企画実現
- 3月 報告書提出

パトウーンボーン郡ノンブン村



バクセー郡タートルアン村



パージャン郡ノンサーイ村



サラワン県ラオオム郡ホアイホン村



パチエン郡ゲーンサイヤ村



タオイ族の伝統が生きる彫刻の村
チャンパサック県パトゥーンポー郡ノンブン村

■距離: パクセー市内から車で1時間

■地図



タオイ族とは

地域: 南部山岳地帯

言語: タオイ語

宗教: 精霊、キリスト教

文化: 煙草を吸う姿

伝統: 農業、狩猟採集、籠、木工品

タオイ族の女性の姿を表現しているそう。丸い髪の毛の結び方と首飾り、煙草を吸う仕草が民族の女性の特徴だそうです。

昔から伝統的に彫刻を掘ることが、民族の伝統を継承する手段であったということ。実際に美しい彫刻の数々から選び抜いたいくつかをご紹介します。





民族の伝統的な衣装を着た木工品。パクセーのホテルやゲストハウス等、玄関先のあらゆる場所で発見できます。



こちらは 30 以上ある少数民族のデザインの中の1つ。果物を運ぶ女性が表現されています。



日本の見猿、聞か猿言わざるに似た人形。ユーモアあり可愛いのが特徴です。



古都ルアンパバーンの伝説を掘るための下書をしているところ。下書きに 2 週間、彫刻には、3 ヶ月もかかるそうです。

カトウ族が織りなす美しいコットン村

場所：サラワン県ラオガム郡ホアイホン村
距離：パクセー市内より車で1時間



カトウ族とは？

地域：南部山岳地帯

言語：カトウ語

宗教：精霊信仰

文化：布織物を座って織る女性

伝統：農業、狩猟採集、布織物

昔から伝統的に布を織ることが、民族の伝統を継承する手段でもあった様です。ここからは、実際に美しい布織物の数々から選び抜いたいくつかをご紹介します。



伝統的織り方と、日本人による支援で得た新しい技術であるバナナ繊維を組み合わせた布織物。20種類以上あるデザインの中でも、この白い部分は、敵から身を守るフェンスを民族的に表現しているということです。



こんな風に座って織物を行います。珍しい織り方が見られる&体験できるのは、世界でも、何とこの村だけでしょう。少数民族により紡がれてきた歴史の重厚感を感じます。



繭でつくってこんな紐を使って布を織っていきます。自然の優美さを感じました。



美しい織物です。
風に揺られて気持ち良さそうでした。



布織物を作る女性組織のリーダー。代表というだけあり、風格がありました。



実は開発におけるモデルの村に指定される位
評価の高い村だそうです。



たらいに入っているのが染色された繭でしょう。
おばあさんは昔ながらの民族の髪型をしています。



ジャングルが茂る緑豊かな紙の村

元々は布の村人と同じくベトナムとラオスの国境付近から移動してきた村です。クワイ族の伝統から、新たに紙の技術を習得し、村の進化に挑戦中です。



村の紙製品製作グループのリーダー（左）、と村長さん（右）です。少し緊張されていますが丁寧に紙作りを説明して下さる優しいお二人でした。



ようこそ、ゲーンジイヤ村への記載。



村から車で 3 分程の場所にこんなジャングルがありました。そこをどんどん進んで行くと、そこには紙の原料になる木があります。



なたを使い少し傷を付け、皮を剥がしていきます。

すると、この様な繊維が取れます。



それを水と一緒に機械で混ぜ込みます。



更に木の枠ですきます。



するとなんとこんな紙が出来るのです。自然の染色を最後に施せばより美しい紙に変身です。

ジャムの村(ラオ族)

パクセー市内の名産であるジャムをつくる村の中でも、1番有名なのはここタートルアンです。元々家庭用に作っていたものを商品にすれば、出稼ぎにいくことなく子ども女性も家に居られるということで商品化と販売が始まったそうです。



黄色はココナッツとマンゴーの色です。

世代を引き継ぎ何代にも伝えられる、伝承の味は、他では味わうことが出来ないレアな美味です。ぐつぐつと煮られています。上下お二人は親子でジャムづくりを営まれているということ



薪で煮るとひと味違います。

煮た後はこんな風に軒先で乾かします。



お兄さんが丁寧に丹誠込めながら、太陽の光にジャムをあてているところです。



遂に出来上がったジャムは、こんな風に板状で売られます。ナチュラルな甘さで、ほんとうに美味しい特産品になります。



東南アジアならではの、タマリンドです。



こんな商品になります。食物繊維が時々そのまま残っていて、自然の恵みをダイレクトに感じられる味に仕上がっています。

お店ではこの様なステッカーを貼ってくれます。お土産に最適です。



フランスの香り漂う昔ながらのお茶の村

場所： バージェン郡ノンサーイ村

距離： パクセー市内より車で 40 分程

フランスの援助で90年代よりお茶づくりを始めた村。茶葉は全てノンサーイ村の農家さんから買い上げ、村にある2つの工場で焙煎します。

フェアトレードマークも取得している信頼出来るお茶を生産している証です。



オフィスの裏にある工場の一部を拝見させて頂きました。こんな機械で茶を焙煎するんですね。

ようこそ、ノンサーイ村への表示です。



お茶の製造を賄っている会社の貿易担当マネージャーの方々や、村の生産者組織メンバーの方が、村をご紹介して下さることになりました。



庭の軒先には、今の時期はコーヒーも、この様に干してあります。香ばしい豆が出来そうです。



村の農家さんはこうやってお茶を積んでいます。注文が多い時期には、もっと低く木を刈って、若葉を取り易い状態にしておくそうです。



取れたお茶の葉はこんな感じ。齧って味みすることもその場で出来ました。フレッシュなお茶は少し香ばしく初めての香りを経験出来ました。



村の茶畑はカントリーロードで良い雰囲気です。



お忙しい中、ご高覧いただき誠にありがとうございました。

以上